

『金匱要略』の古版本二種

についての新知見

○真柳誠・小曾戸洋

『金匱要略』は中国伝統医学における最基本典籍の一つであり、現代に至っても日本や中国で頻用される漢方処方中、本書を出典とするものは少なくない。おおよそ古典を研究する際、先ずその底本について十分な検討がされねばならぬことは周知のとおりである。そしてその内容が実際に応用されることの多い医薬古籍については、その書誌学的検討から始めねばならぬことは一層当然のことである。『金匱要略』についてはこの検討が未だ充分になされておらず、不明確なままにされていた。我々はこれを明確にすることは急務と考え、調査を行い幾つかの新知見を得ることができたので、その概要を報告する。

『金匱要略』の原刊本は北宋の儒臣・林億らによるものであるが、その現存は明らかでない。だが我々のこれまで

の調査から基本的な版本は、既知の俞橋本(明嘉靖年間刊)、仲景全書本(趙開美本・明万曆二十七年刊)、医統本(明万曆二十九年刊)以外に以下の二種が現存し、通行の諸本は大体この五種に由来することがわかった。

(一)元・鄧珍刊『新編金匱方論』

三卷二冊。匡郭・縦約一九・六cm、横約一二・六cm。後半葉の行と字詰は「鄧珍序(草書)」八行一四字、「林億序」・「目錄」・「正文」は一三行二四字である。現在は北京大学図書館に唯一架蔵されるのみである。

本書の鄧珍の序は元・至元六(一三四〇)年に書かれており、現存を確かめられる最古の刻本であろう。趙開美本にも鄧珍序の全文が収められているので、元刻本の存在は知られていたが、その現存は信じられていなかった。ちなみに本書上巻末の余白に書かれた楊守敬の跋と每巻頭・巻末の印跡より、本書は楊守敬が光緒二三(一八九七)年に発見・その後李盛鐸の所蔵に帰し、最後に龐大な旧李盛鐸蔵書とともに北京大学に収蔵された経緯がわかる。

楊守敬は光緒二七(一九〇一)年に『留真譜初編』を上梓し、この中に三種の『金匱要略』の書影を収めたが、その

説明は加えなかつた。故にその一種が兪橋本である以外、残りの二種については不明であり、注目されることもなかつた。そして今これを対比すると、一つは元刻本に、他の一つは後述の明仿宋本と完全に一致することが明らかになつた。

本書の体式を見ると、書名は『新編金匱方論』となつている。これは『重広補注黄帝内経素問』等と同様、宋臣が校定の際に諸医書より方剤を採り毎篇末に附したことを示している。また正文の各巻頭で林億・王叔和・張仲景の順に名を配している。これは古人の修書経進の体式である。この二点からも本書は現行諸本よりも北宋原刊本の旧態を残していることが窺える。

(二) 明・無名氏仿宋剛本『新編金匱要略方論』

三卷二冊。匡郭・縦約一八・三cm、横約一三・二cm。每半葉の行と字詰は、目錄・正文共に十行二十字であるが、序部分は現存本には欠損するため不明。中国科学院図書館蔵。

本書については森立之の『経籍訪古志』に多紀元簡の言を引いた説明があるのみで、岡西為人、石原明氏は所在

不明もしくは亡佚としていた。事実元簡旧蔵本の所在は今のところ不明である。一方中国では『中医圖書聯合目錄』に、中国科学院図書館蔵の本書を「清初刊本」としている。我々は友人の中日友好上の協力により本書を実見し、これが『留真譜』所収の書影、そして『訪古志』の記述と完全に一致符合することを確認した。この結果、「清初刊本」とは実は元簡の言う明仿南宋刻本であることを確信するに至つた。

本書は既に元簡が指摘する如く、中巻末の欠落や体式、誤字の傾向等多くの点で兪橋本と一致している。しかし目錄の一部ではその処方配列等が前述の元刻本とよく符合する。そしてやはり書名に「新編」を付す点、林億・王叔和・張仲景の配列順、また元簡の言う序文の体式からも元刻本同様北宋原刊本の旧態を残していることは首肯でき。だがこのことと実際に典拠としての使用に堪え得るかは別問題である。本書の誤字の夥しさは諸本の一等であり、書誌学的研究・校勘・考証以外の目的には適さないであらう。

『金匱要略』は元々が虫損・錯簡の多い節略本から校刊

されたものである。そして現存する版本は程度の差こそあれ、誤字・字句の変動が一樣に多い。江戸時代には幾種かの校勘された刊本もあるが、これも十分なものではない。『金匱要略』は今後より多くの正確な資料による校勘が必要な古典であろう。

(北里研究所付属東洋医学総合研究所・医史学研究室)

中国伝統医学修得学生の 漢語素養について(最終報)

小杉 順 一

一、研究目的

中国伝統医学の一領域である鍼灸の部門は現在漸く生理学の方法が適用され数々の実験成績が集積しつつある段階に至っているが、それらを総説し、体系づける作業にはまだしばらく時間が必要であり、かつ新しい立場に視点をすえた思考方法の確立が求められる。

鍼灸の治効機序における未知の分野に対しては、充分計画された着実な実験データの収集・分類と同時に、過去の長い経験の積み重ねである古典の正確な読解と歴史の変遷過程でのその位置づけが重要と思われる。

これらの作業は、専門的訓練で養成された人々の責任に委ねることが当然ではあるが、中国伝統医学の実践に携わる人々は、医療の社会的責任を分担するという意味におい